

一喜一憂

立春を過ぎたばかりなのに春の海のように。生まれ育った浜辺ですが、あの頃の海もこんな表情であっただろうか。

「まち」。幾つになっても、思い出という形で、心に残っているのはふるさとです。

母の墓前に退任の報告をした帰り道、潮風に吹かれて育った者でなければ見えないものを見るような気持ちで、昔懐かしい町を歩きました。

戦後の日本の成長は目覚しく、百年かかって、なかなかできないものを短い年月で実現しましたが、その駆け足の裏側で、何か途方もない大きなものを忘れてきたようなむなしさ、不安を感じている。それを言葉に刻む作業を地方自治に携わる者は心得なければならぬ。そう考えながら、私は、そのために何をしてきたのか。

人の一生は後悔の連続です。学生時代が終わると、もっと勉強しておけばよかったと悔やみ、サラリーマンが終わると、もっと違う働き方があったのではと反省します。数え切れないほど、職を転々とした私の支えは母でした。子ども心に母は選挙が好きだったと記憶しています。二十七年間の政治生活で一度もそれを体験させなかった心残り、生まれる前に父を亡くした末っ子のせい、母との思い出だけが浮かんできます。

戦前、戦中、戦後と苦勞してきた母の生涯は、父が残した七人の子どもをいかに成長させるかに費やされたのでした。子として母を思い、母を慕う心は当然ですが、母の力だけで育てられた者の思いは、またひとしおであります。

流行のおしゃれには無縁でした。経済成長とともに華やいできたおしゃれを楽しむには少し年を取りすぎたのか、野良着姿だけが似合いの母でした。しかし、流行のおしゃれで身を飾るものがなくても、母親としての折り目、節目がいつも爽やかに決まっていた。母への思いは消え去ろうとしている良きものへの郷愁です。

ほんの少し昔の面影を残す通りを歩きながら、長寿者訪問の折老人ホームで会ったおばあちゃんが店番をしていた駄菓子屋、金物屋、釣具屋、その前の本屋等、特別金持ちではなかったようですが、明るい人々が暮らしていました。この店も、あの子はどこの子か知っていて、悪いことをすれば親以上に叱りました。足踏みミシン、紙芝居、蚊帳、縁側、原っぱ、夜警団。戦後間もなくは戦前の続きのようににまだ貧しかったと思います。風呂は、薪。そのため冬休みは母に連れられ、一年分の燃料にする薪を募山の上の方まで取りに行かされました。下水道の普及はもろろんバキュームカーもなく、悪臭防止法も、公害防止条例などはなかったのか、豚小屋や牛舎が悪臭を放っていました。

不思議に不快感はありませんでした。近くの家の裏庭にたくさんの鶏が飼われ、その家の子と一緒に忍び込んだ鶏小屋で産みたてを失敬した卵の温もりは忘れられず、今でも私は、あの家の鶏に育てられたと密かに自慢することがあります。

晴れた日、着物の洗い張りをする母の姿、その板を滑り台にして叱られたこと、電気冷蔵庫なんかなく、母の後に少し離れた製氷所まで氷を買いに行きました。のこぎりで四角い一塊の氷をひいてもらったその店が残されていたのが嬉しかった。低い家並みが続き、その上にたなびく鯉のぼり、大空が青く澄み渡り、何と高くまぶしかったことか。その鯉のぼりが、ある日突然、掛け布団に化け、目先に大きな口が見え、飲み込まれそうな夜を過ごしたこと。どれもノスタルジック。遠い故郷を懐かしむ気持ちになりました。

どこへ行っても、そのまちなかの良さは必ずあります。また、そこに暮らしている人でしか知らない歴史があります。その時代その時代に存在していた「人」の生き様が文化を育て、まちをつくっているのだと思います。降り出した雨の中、濃い緑色に染まった静かな野山を見ていると、今も昔も人々の心はそんなに変わりはなく、大昔、この地に響いた声さえわずかに聞こえてくるようでした。都市の再生や地方の活性化がどんなに進もうと、いくら便利になっても、効率化や合理化だけでは、人は

生活の豊かさを実感できません。

古きもの、新しきもの、変えていくもの、変えてはならないものを見極め、文化的な視点で、まちづくりを目指すことが必要だと思います。職を退く今、私は七十歳の古希、これも何かの縁でしょうか。

男には人生のうちで、仕事に没頭して家庭を顧みない時期があります。そうでなければ、本当のトップとして生きているとは言えないと思います。わき目も振らず、消極的に成功するなら積極的に失敗をするつもりで仕事をする立場が一度や二度、誰にも必ずやってきます。

人は、本来寂しいものです。人生を振り返ってみると、「さようなら」ばかり繰り返してきたような気がします。

十二年間住み慣れた生活の場が、五月五日の時計の針が十二時を刻むと同時に私を受け入れる職場ではなくなりません。

健康が続く限り次の目的に向かってスタートいたします。町民の皆様のご多幸と大好きな湯河原町の発展を心よりお祈り申し上げ、町政を離れます。

長い間お世話になりました。ご愛読に感謝いたします。ありがとうございました。

町長

米岡幸男

